根岸小

自分のこととして課題解決する子の育成

～解決の見通しをもたせる場と振り返りをさせる場の工夫～（２年計画の１年次）

校　長　　長倉　一志

１　研究主題について

本校では、教育目標である「かしこく　やさしく　たくましく」の具現化のために、昨年度は「自分のこととして課題解決する子の育成～見通しと振り返りを大切にした授業を通して～」という主題を掲げ、ブロックごとに算数科の授業研究を行い、研究を進めた。その結果、授業の流れをシステム化することで、児童が見通しをもって取り組み、安心して活動することができるようになってきた。また、選択肢や文章など学年に応じた振り返りを行い、できるようになったことを確認することで、わかったことやできたことを実感できるようにもなってきた。しかし、児童の実態として、粘り強く取り組むことが苦手で、基礎的・基本的な知識・技能の定着が弱く、自分の考えをもてない、自分の考えがあっても自信をもてず話せないことが課題として残った。学力諸検査等においても、知識・技能の結果は高いとは言えず、「身に付いた」という実感をもてない、主体的に学習に取り組む態度も弱い児童がみられた。

そこで、今年度は、解決の見通しをもたせる場や振り返りをさせる場の工夫をしていきたいと考えた。解決の見通しをもたせる場面では、自分の考えをもたせる場を工夫したり、児童の気付きや思考を生かした解決の見通しの共有の仕方を工夫したりする。具体的には、①「なぜ・どこに違いがあるのだろうか」という思考のズレ等に着目させることで、問いをもたせ、本時のめあてを明確にする。②「この考えを使ったらできそうだ」という手がかりを見つけ出させ、児童の気付きをつなぎながら解決の見通しをもたせ、主体的・対話的に課題解決できるようにする。また、振り返りでは、導入段階を前時の学習を振り返る場、展開段階をこれまでの学習を振り返る場、終末段階を本時の学習を振り返る場と位置付け、日常の授業実践を行うことで、数学的な見方・考え方の育成につながる児童の思考を積極的に価値付けていく。このように、解決の見通しをもたせる場と振り返りをさせる場の工夫をすることで、児童は安心感や自信をもって課題を解決できるようになり、「自分のこととして課題解決する子の育成」に迫ることができると考える。

今年度の学校目標は「レッツ　トライ！　自信をもって行動する力を伸ばす」である。基礎的・基本的な知識・技能の定着に努め、学習における意欲の向上を図り、学力全体の底上げをしていきたい。

２　研究のねらい

安心感や自信をもって、自分のこととして課題解決する子の育成をするために、解決の見通しをもたせる場と振り返りをさせる場の工夫をすることが効果的であることを、授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

(1) 解決の見通しをもたせる場面では、自分の考えをもたせる場や児童の気付きや思考を生かした解決の見通しの共有の仕方を工夫することで、主体的に取り組むことができると考える。

(2) 振り返りの場面では、前時までの学習や生活経験、既習事項を想起させたり、できるようになったことや身に付いたことの確認をしたりする場を工夫することで、学習内容の習得や思考の価値付けを実感することができると考える。

４　研究内容

(1) 授業の充実

ア　問題解決的な学習を取り入れた授業づくり

イ　特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり

ウ　１人１台端末を活用した授業づくり

(2) 基礎的・基本的な知識・技能と学習規律の定着

ア　パワーアップ週間・パワーアップテストの実施等による知識・技能の定着

イ　「ねぎしっ子スタンダード」を活用した学習規律の育成

ウ　朝自習や自学ノートを活用した自分で学ぶ力の育成

５　研究の経過

(1) 研究仮設に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名・講師・成果・授業の概要　等
６	２２	第１回　授業研究（要請訪問） ３学年「ぼうグラフ」　授業者　教諭　相馬　七海 講師　総合教育センター副所長兼主任指導主事 松橋　祐哉先生
１１	１０	第２回授業研究 ６学年「図形の拡大と縮小」　授業者　教諭　中川原　慧美
１２	８	第３回授業研究 ２学年「かけ算（２）」　授業者　教諭　佐藤　直子

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
５	１６	「嘔吐物処理の仕方や熱中症対策等について」 講師　本校養護教諭　中山　夏子
８	２３	要請訪問 「１人１台端末を活用した授業について」 講師　総合教育センター主任指導主事 石井　一二三先生
９	２８	「特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりについて」 講師　本校教諭　中岫　美奈子 沼澤　純加 髙橋　稔

６　研究の成果

(1) 課題解決の手がかりとなりそうなことを児童の気付きなどから確かめ、解決の見通しをもたせてから自力解決をすることによって、児童が意欲的に学習に取り組むようになってきた。

(2) 前時の振り返りを生かして本時との違いを見付けるなどし、本時のめあてを明確にしてから取り組むというパターン化した学習の流れを行うことによって、見通しをもって取り組み、安心して学習に取り組むようになってきた。

(3) 導入段階を前時の学習を振り返る場、展開段階をこれまでの学習を振り返る場、終末段階を本時の学習を振り返る場といった振り返りの捉え方の幅を広げた授業づくりをすることで、学びの確認を必要な時にすることができた。

７　研究の課題

(1) 解決の見通しをどこまでもたせればよいのかという課題が残ったため、児童が解決の見通しをもった姿や解決の見通しをもたせる場面の共通理解をしていきたい。

(2) 振り返りについて統一したものが必要という意見があったため、振り返りを書かせる際の内容項目、単元における振り返りの場面の設定等、振り返りのもち方の共有をしていきたい。

（記入者　岩城　裕美子）